

PHAYAOLレポート 2008-18 (～友達と助け合う～)

スタディツアー参加者からの報告 坪谷純希さん 山口県立大学 国際文化学科 (2年)

タイ・スタディツアーの感想

今回のスタディツアーに参加させてもらい、たくさんのことを経験することができました。そのなかでも、とくに印象深かったのは、モン族の家族へホームステイさせてもらったこととシャンティ寮の子供たちと過ごしたことです。

ホームステイ先の家族は、父親と母親、息子が3人(26, 16, 6歳)、娘が1人(13歳)でした。言葉はタイ語とモン語であり、私はどちらも話すことができなかったため、3泊3日もうまくやれるか、はじめはとても不安でした。しかし、私が行くと家族のみんなは笑顔をくれ、積極的にかかわろうとしてくれて、そのことにすごく助けられました。タイ語の指差し会話帳や、ジェスチャー、簡単な英語などによってコミュニケーションをとり、結局仲良く楽しく過ごすことができましたし、ずっと笑顔でいることができました。家族の温かさに何度も助けられました。

家では、食事の準備などをはじめとした家事は、16の男の子、13の女の子が主に行っていました。朝は早く起き、夜は学校の後に家事を行っており、大変そうに思えました。ですが、「つらくないの?」と女の子に聞いてみると、「つらくないし不便もないよ」と答えていました。日本人から見れば大変そうでも、実際にはそんな風には感じていなくて、みんな幸せそうで楽しそうだなと思いました。

シャンティ寮には、中学生と高校生の子供が40人暮らしていて、私は中学生の男子と一緒に泊まりました。皆積極的で、指差し会話帳を自分から開いて話そうとしてくれたり、遊びに誘ってくれたりしました。これにはすごく助けられました。初めて寮に入る子供は、最初ホームシックになると聞きました。家族から離れ集団生活を強いられるからです。そういった経験をしてきた子供たちだから、きっと私の不安を分かってくれたのだと思います。早く私が寮になじめるように自分達から私を誘いこんでくれたんだと思います。すごくすごく優しく、しっかりした大人な子どもたちでした。当然家事などは自分で行い、朝早く起きて買い出しに行ったり掃除をしたり、朝食の準備をしたりしていました。そんな姿を見ていたので、最後の交流会の時、「親元を離れてさみしくないの?」という質問に、「さみしい」、「親に会いたい」という言葉を聞いた時は、はっとさせられました。いくらしっかりしているとはいえまだ十数歳の子供たち。本当はまだ甘えたいだろうにと考えさせられました。しかしこのシャンティ寮に行けるといっただけで現地では幸運なことであり、寮に入れず貧しさゆえに学校へ行けないという子供も数多くいるという現状で、こうした子供たちの貧しさやさみしさの解決のために、自分がなにもできないことを残念に思いました。

しかし、この旅ではタイに友達をつくることができました。いきなり知らない国のために「援助する」というのは難しいと思いますが、「友達と助け合う」ということならばできるような気がします。今回の旅を第一歩とし、これからもっと世界中に友達を作り、みんなと助け合っていけたらと思います。

今回のツアーでは、現地のでかかわった方々の笑顔や優しさ、また一緒にツアーに参加した方々、事前準備を手伝っていただいた方々など、周囲の多くの人々に支えられ、充実した時間を過ごすことができました。本当にありがとうございました。

2008.9.28-NGO ネットワーク山口報告会